

2012



TANe FUNe
ARCHIVE
PROJECT

『種は船 in 舞鶴』
アーカイブプロジェクト
活動の記録 2012

ごあいさつ

「P+ARCHIVE（ピープラス・アーカイブ）」は、社会・地域に関わるアート活動のアーカイブ構築とその普及事業の一環として、2010年より現在進行形のアートプロジェクトをアーカイブ化することに取り組んで参りました。2011年度には、東京青山地区で1995～2000年に実施された『Morphe』プロジェクトをアーカイブ化することを試み、そして今年度は、日比野克彦氏による『種は船 in 舞鶴』プロジェクトをケーススタディとしてアーカイビングしていく活動を行ないました。

近年、地域・社会と関わるプロジェクト型のアート活動の記録を残すことへの関心が高まっています。こういった活動は、完成した作品ばかりではなく、創造の背景やプロセスが重要となりますが、それらの記録が最も失われやすいことも事実です。活動を通じて作成される膨大な資料は、運営側のマンパワーや資金の不足などの理由から散逸しがちな現状にあります。

プロジェクト資料を包括的にアーカイブしていくことはどうすれば可能になるのか？『種は船 in 舞鶴』のアーカイブ化という一年間の活動は、その有効な手法やスキルを見つけ出そうという試行錯誤の積み重ねであり、アートプロジェクトのアーカイブの意義、そしてその困難さを実感するものでした。

その過程を本冊子にまとめ、皆さまにご報告させていただきます。この機会を通して、アートプロジェクトのアーカイブについて多くの方々とその課題を共有し、より良いあり方を検討できるステップとなることを願っております。

末筆となりますが、『種は船 in 舞鶴』のアーカイブプロジェクトに関わって頂いたすべての皆さまにこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

平成25年3月吉日

特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センター

『種は船 in 舞鶴』プロジェクトとは？

アーティスト・日比野克彦が、これまで金沢、新潟、水戸、横浜、鹿児島などで実施してきた朝顔の種の形を模した「船」を創作する『種は船』プロジェクトの舞鶴版です。全国各地で行われている朝顔の種を運ぶ『明後日朝顔プロジェクト』から、「種が土地や植物の記憶を運ぶ〈乗り物〉であるように、船が物流・交易の要となって物を運び、人々の思いや記憶を運ぶ」という着想を得て、2010年より3カ年計画でスタートしました。

1年目はダンボールで模型船《舞鶴丸》を造船、2年目からは船の一部となる漁網を編み、そして3年目にはエンジン付きの《TANeFUNe（タネフネ）》を造船しました。2012年5月19日に《TANeFUNe》に乗り込み舞鶴港から出港し、35の港に立ち寄り、地元との交流の記憶を船に積み込みながら航海を続け、8月6日に航海の目的地である新潟港に到着しました。海の繋がりの視点から新たな価値観を創造し「水域文化」を構築していくプロジェクトです。



『種は船』プロジェクト 2012年度の主なイベントの流れ

2012年5月 《TANeFUNe》の故郷、舞鶴から出航

2012年5～8月 日本海の35の港に立ち寄りながら航海する

2012年8月 航海の目的地、新潟港に到着

2012年8～12月 新潟『水と土の芸術祭』にて《TANeFUNe》を展示

2012年10～11月 『TRANS ARTS TOKYO』展にて『船は種アーカイブ準備室』を開催

2013年1～3月 舞鶴にて『種は船⇄船は種』ドキュメント展』を開催



『種は船』アーカイブプロジェクト

『種は船 in 舞鶴』をアーカイブ化する活動は、現在進行形のアートプロジェクトの記録を"走りながら残す"というトライアルとして、2012年5月から開始されました。そして、3年間のプロジェクトの全体像を伝えるために、過去2年間（2010年～2012年4月）に作成された様々な記録資料もアーカイブ化の対象として含まれていました。

アーカイブプロジェクトのスタートとほぼ同時に自走船《TANeFUNe》が舞鶴を出港。主催団体「一般社団法人 torindo」の代表の森真理子氏を中心としたスタッフにより、できるかぎりの記録が残される努力が払われていきました。「いかに資料を失うことなく効率的に残していくか」という課題のもとに、"レコードマネジメント"を取り入れるという新たな手法も導入されていきました。

約3か月の旅を経て《TANeFUNe》が新潟湾に到着し、『種は船 in 舞鶴』プロジェクトが完結した後、その期間中にリアルタイムで作成された「現用資料」の一部がアーカイブチームの手元に届いたのは、9月頃となりました。残りの約半年間で、プロジェクトの多様な記録資料を整理・目録化するアーカイビングが急ピッチではじまりました。デジタル化も並行して進められ、未来に向けて残されるこのアーカイビング活動は、2013年3月末においてまだ完成途中です。

Keyword

「アーカイビング体質」

発生する資料をできるかぎり残す意識を共有するために、プロジェクトを実施中は日比野克彦氏の「アーカイビング体質になろう！」を合い言葉に、『種は船』プロジェクト関係者で資料の保存に努めた。

アーカイビングプロジェクト4つのプロセス

1 レコードマネジメント 2012.6 ~

- ▶ 管理手法の設定
- ▶ リテンションスケジュール表を作成
- ▶ レコードキーピングの実施

2 資料の受け入れと目録の作成 2012.8 ~

- ▶ 現場の舞鶴より資料の移管
- ▶ 移管された資料の概要調査
- ▶ 目録の作成

3 デジタル撮影・スキャニング 2012.12 ~

- ▶ デジタルカメラで撮影
- ▶ スキャナーでスキャニング
- ▶ 画像編集ソフトで処理

4 保存容器への整理・保管 2013.1 ~

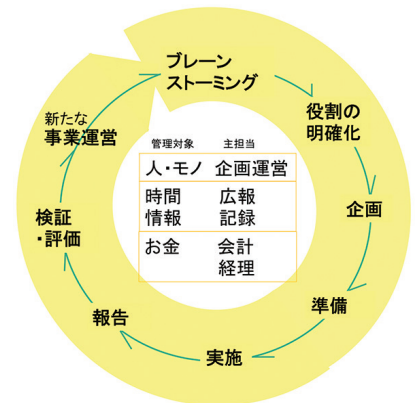
- ▶ ファイリングボックスへ整理
- ▶ 大型資料の梱包
- ▶ インデックスシートの作成

レコードマネジメント

2012.6 ~

レコードマネジメントとは、記録媒体の種類を問わず、発生時から保存年限満了時に至るまで、記録情報をコントロールすることです。業務手順を分析し、その各段階で作成される記録名を洗い出し、＜発生→伝達→活用→保管→保存→廃棄＞という一連のプロセスにおける管理方法を定めます。『種は船』では右記のようなプロジェクト業務の手順に沿って、アウトプット（目録記載事項）から記録名を取り込み、管理手法を定め、情報漏えいや喪失を防ぐ保管管理体制と共有化を図り、説明責任も果たせるようにしました。

（業務手順は、帆足亜紀『アートプロジェクト運営ガイドライン』（公益財団法人東京都歴史文化財団、2011年）、11頁を参照）



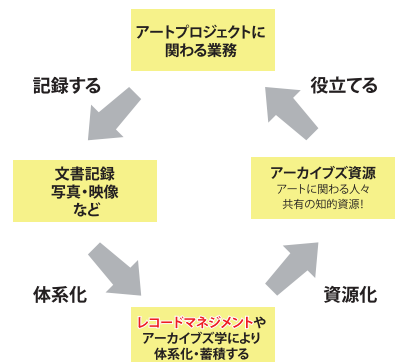
リテンションスケジュール表

業務手順毎の記録管理項目は、下記ようになります。業務項目（＝分類）毎に原本主管部署と原本媒体を定め、関連法律や消失時のリスク、利用頻度等を考慮し、保存年限を定めます。発生量が多ければ保存場所をオフィスと倉庫に分割して管理し、同時に機密区分を定め、アクセス権を設定します。この管理事項を一覧表でまとめたものが「リテンションスケジュール表（RS表）」であり、レコードマネジメント全体をコントロールするルールとなります。ヒナ型を参照してファイル名、ファイルシリーズ名を記入し、実務的には分冊基準を設定して、組織のルールとして定着させます。

ISO15489に基づく基準(A:真正性、R:信頼性、I:完全性、U:利用性)											
A	R&U			I		I	U	I			R
PJ名	CD	手順(分類)	ツール No.	発生記録名(ヒナ型)	記録内容(ヒナ型)	分冊基準	ファイル名またはファイルシリーズ名	作成部署			
作成年月	原本主管部署	媒体種別	原本保存年限 オフィス 倉庫 合計	法定年限	非原本保存年限	保存年限満了時の措置	機密区分	個人情報	バイトルR	保存場所	作成者

レコードキーピング

「保存年限満了時の措置」として、保存か廃棄かの判断（＝評価選別結果）を予め設定しておきます。判断基準は、後年の業務の参照資料となるか、権利を守る証拠として有用か、歴史的知的資源として教育に生かせるものであるかで判断します。上記RS表の「保存年限満了時の措置」欄に「アーカイブ書庫」または「廃棄」等を予め記載しておくことにより、将来に渡り、記録が管理され、次世代に引き継がれることができる仕組みが出来上がります。レコードマネジメントにアーカイブズへの道筋を見通し、一体管理することを、「レコードキーピング」といいます。



資料の受け入れと目録の作成

2012.8 ~

2

資料の受け入れと概要調査



舞鶴より移管された資料

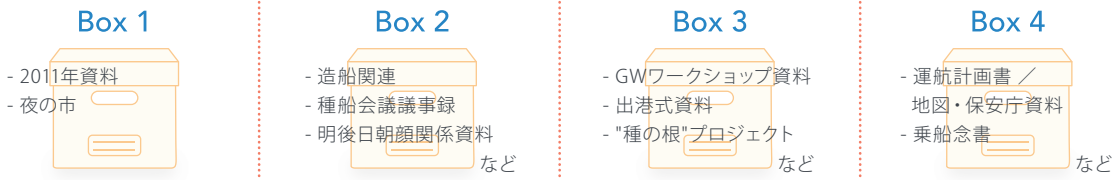
8月に主催者の torindo から移管された『種は船』プロジェクトの資料はまず、原秩序¹⁾を記録するために受け入れ時の状態を撮影します。それから一点ずつ資料の概要を調査し、その成果を「概要目録」にまとめました。

調査の結果、テーマごとに資料をまとめたファイルが、4つの箱に分けて移管されてきたことが分かりました。そこで箱1つずつを「ファンド」²⁾として捉え、それぞれ「Box 1~4」と名称を付け「概要目録」に入力していきました。

¹⁾原秩序：調査開始時点での資料の並べ方や収め方

²⁾ファンド：特定の個人または組織によって、作成または蓄積された資料群

移管されたときの資料（原秩序）の構造イメージ



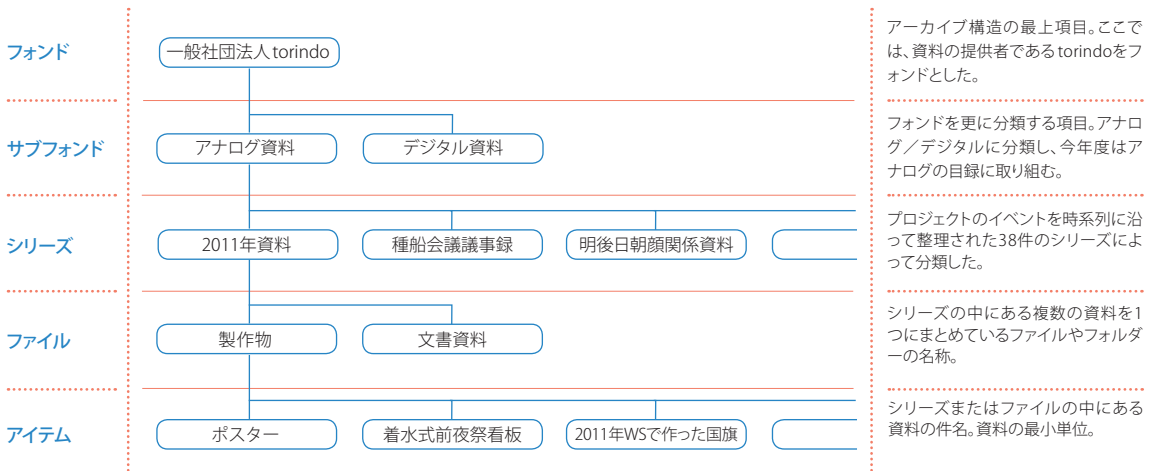
目録の作成

概要調査の後、資料を1件ずつさらに詳しく調査し、より詳細な情報を記録する「本目録」を作成する作業に移ります。「本目録」には資料の作成者や作成日、そしてフォーマットなどの資料に関する情報の他に、資料IDや画像ファイル名など管理に必要な情報も記述しました。

そして、調査を進めた結果、資料群を当初の予定通りレコードマネジメントで定めた管理手法に基づいて分類することは難しいことが分かりました。そこで、概要調査によって明らかになったイベントのテーマごとの分類をそのまま採用し、シリーズ³⁾に位置づけることにしました。

³⁾シリーズ：ファンド内の資料群を、事務分掌などの基準に基づき分類した資料群

『種は船 in 舞鶴』アーカイブの階層構造イメージ

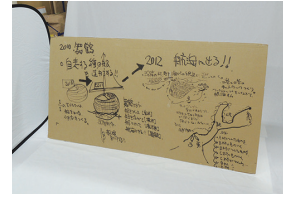


デジタル撮影・スキャン

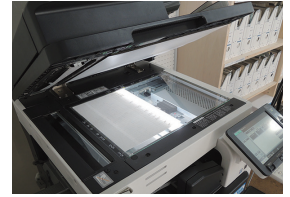
2012.12 ~

今回、アーカイブに取り組んだ『種は船』プロジェクトの資料の特徴として、素材やサイズが多様多様であることが挙げられます。アーティストの日比野克彦氏は、段ボールを作品に取り入れて制作するため、段ボールを素材とした大型の資料が多く含まれています。一方で、企画書や会議の議事録のようにA4サイズ規格の書類や、プロジェクトについての小さな紙片のメモ書きも多く資料に含まれています。

『種は船』プロジェクトに限らず、様々なサイズ・素材の資料が残されるのが、アートプロジェクトのアーカイブの特徴といえるでしょう。このように、サイズや素材が多岐にわたるアートプロジェクトの資料を管理し、今後の調査・閲覧を容易にするために、デジタル化が重要なプロセスとなります。デジタル画像を参照することで、物理的に重量のある資料を持ち出す労力も軽減されます。



大型の段ボールパネル



書類状の資料をスキャンする

資料のデジタル化

大型の資料はデジタルカメラによる撮影、スキャナーに収まるA3サイズまでの紙資料については高機能スキャナーでスキャンしてデジタル化を行いました。スキャナーで資料をデジタル化するには、可能な限り高詳細の画像で保存するために、「TIFF形式」（TIFF形式が望ましいがJPG形式も可）、「解像度300dpi」の設定でスキャンを進めました。

2012年12月に簡易スタジオを設営し、大型の資料を中心に撮影を実施しました。撮影条件を均一にするために一つの資料ごとに撮影距離、光量など綿密に調整しながら撮影を進めました。撮影した資料は、将来的なデジタルアーカイブも視野に入れて、画像編集ソフトで画像の処理を行ないました。

撮影した『種は船 in 舞鶴』資料



簡易のスタジオを設営し、プロのフォトグラファーによって撮影された



© Wakako Dai

数字でみる

『種は船』アーカイブ

『種は船』アーカイブの資料数

1243
件

紙や立体などのモノ資料の総計。今後の調査で更に増える可能性がある。

2日間で撮影した資料数

155
点

撮影に充てられたのは2日間。大型の資料を中心に撮影した。

目録作成の作業時間

210
時間

2013年3月までの作業時間は、概要目録の調査・入力に約150時間、本目録の作成に、約60時間。

保存容器への整理・保管

2013.1 ~

保存容器（ファイリングボックス）への整理・保管

目録入力、デジタル化が完了した資料から個別フォルダに収め、それぞれシリーズごとに汚れや破損から守るためにファイリングボックスに整理して保管しました。目的の資料を探しやすいように、目録に沿って資料の内容を示すラベルを作成しました。

ファイリングボックスに収めるまでの作業プロセス



一つ一つの資料を目録のファイルごとに分類し、中折式の「個別フォルダー」に収める。



「固有名詞、内容・形態、年月・期間」の三要素を記入し、フォルダーラベルを作成する。



資料を目録のシリーズごとに分類し、「ファイリングボックス」のダラララの中に収めていく。



内容物のシリーズを示すラベルを作成し、ファイリングボックスを保存棚に収納する。

大型の資料も適切な容器で保管する

立体の船模型やダンボールパネルなど、ファイリングボックスに収まらないサイズの資料は、それぞれ適切なサイズの箱やボードなどの容器（長期的に保存するためには中性紙が望ましい）を用意し、破損を防ぐために緩衝材で保護して保管しました。



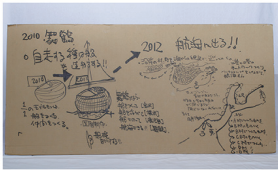
インデックスシートの作成

ファイリングボックスは、基本的にA4サイズの書類を収めるための保存容器であり、『種は船』プロジェクトのように、大型の資料も多く含まれるプロジェクトでは、このファイリングボックスに収まらない資料が多く出てきました。

資料の管理は目録でも行なうことはできますが、画像などをすぐに参照できないため、「インデックスシート」の使用により、プロジェクトのアーカイブ資料の活用を容易にすることができます。

「インデックスシート」には、資料の基本項目と一緒にサイズと素材を明記し、写真だけでは伝わりにくい情報も記録します。また、所蔵先を記入することで、ファイリングボックスから、目的の資料へアクセスしやすいように工夫しました。

種は船 ID:



資料名: 2010年東シナガフェスタ展示 ダンボールパネル
 サイズ: W186 x H100 素材: ダンボール

作成者: _____
 年月・期間: _____

備考
 『種は船』プロジェクトの歴史をまとめたダンボールパネル。同様のものが1枚ある。

取得年月日	所蔵先	状態
2012/09/05	PI-ARCHIVEセンター-301号室	一時保管

PI-ARCHIVE

レクチャー&ワークショップの年間スケジュール



日比野克彦氏による第1回レクチャー



第3回レクチャーでラベルの記入を練習



見学ツアーにて《TANeFuNe》に体験乗船



「日々の明々後日」にてオリエンテーション



「船は種アーカイブ準備室」にて出張講座



ワークショップでの目録入力の実習

ベーシックコース (アーカイブについてのレクチャーを5回)

- 2012 05.30 第1回レクチャー「キックオフミーティング 日比野克彦氏レクチャー」
講師：日比野克彦 (アーティスト)
- 06.06 第2回レクチャー「アーカイブするということ」
講師：筒井弥生 (アート・ドキュメンテーション学会会員)
- 06.13 第3回レクチャー「プロジェクト進捗管理とレコード・マネジメント」
講師：齋藤柳子 (レコード・マネジメントコンサルタント・学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻博士後期課程)
- 06.27 第4回レクチャー「文書のライフサイクルと管理」
講師：柴田葵 (桜美林大学非常勤講師)
- 07.11 第5回レクチャー「アーカイブズを公開するにあたって：法の観点から」
講師：松永しのぶ (国立国会図書館総務部)

見学ツアー／オリエンテーション

- 08.04 「『種は船』プロジェクト見学ツアー」
～ 08.06 《TANeFuNe》の新潟港への到着に合わせて、新潟の『大地の芸術祭』と『水と土の芸術祭』、『種は船』プロジェクトの見学ツアーを実施。
- 09.14 オリエンテーション「アートプロジェクトの記録について」
後半のワークショップ開始にあたり、ケーススタディとしている『種は船』プロジェクト、そして過去のアートプロジェクトの記録についての考察と、受講生同士の対話。

実践コース (ワークショップを2～3週間に1回実施)

- 09.26 ワークショップ01「アーキビストの心得と規定倫理について」
- 10.10 ワークショップ02「目録入力の実習」
- 10.25 ワークショップ03「『船は種アーカイブ準備室』にて目録入力の実習①」
- 11.07 ワークショップ04「『船は種アーカイブ準備室』にて目録入力の実習②」
- 11.29 ワークショップ05「レコードマネジメント／個別フォルダ作成の実習」
- 12.13 ワークショップ06「目録入力の実習についての振り返り」
- 2013 01.23 ワークショップ07「ユーザー視点から考えるアーカイブについての対話①」
- 02.06 ワークショップ08「ユーザー視点から考えるアーカイブについての対話②」
- 02.27 ワークショップ09「デジタルアーカイブについてのトークセッション」
- 03.13 ワークショップ10「1年間のアーカイブの取り組みについての振り返り」
- インストラクター： 松井隆
レクチャー： 筒井弥生 (ワークショップ01) / 齋藤柳子 (ワークショップ05)
アドバイザー： 齋藤柳子
ゲストスピーカー： 前川充 / 中島光康 (ワークショップ09)



『種は船 アーカイブ準備室』

アーカイブの構造に基づいた展示時の分類

非現用

- 1 2010年資料
- 2 2011年資料

半現用

- 3 企画書
- 4 種船会議事録
- 5 航海の下見資料
- 6 市町村・港事前調査資料
- 7 造船関連
- 8 図面資料
- 9 船資料
- 10 運航計画書 地図・保安庁資料
- 11 HP関係
- 12 明後日朝顔関係資料
- 13 出港前リリース
- 14 船種関連
- 15 GWワークショップ資料
- 16 GWワークショップで作成した朝顔プレート
- 17 グッズ資料
- 18 出港式資料
- 19 出港式スケジュール関連
- 20 出港式に向けて作成した“舞鶴旗プロジェクト”
- 21 出港式の展~3年間のキセキ~資料
- 22 手紙・明後日朝顔関係・子供のTANeFUNeの絵
- 23 出港後アートポート&赤れんが展示資料
- 24 舞鶴からのお祝いメッセージポスター
- 25 出航後のスタッフ資料
- 26 航海中のリリース関係
- 27 航海中のワークショップ資料
- 28 乗船念書
- 29 “種の根”プロジェクト
- 30 夜の市
- 31 新潟到着おめでとうメッセージfrom舞鶴
- 32 『水と土の芸術祭』関連
- 33 新潟港入港招待状関連
- 34 寄港地でもらった土地の資料
- 35 航海中の地元の方とのやりとりをした物
- 36 喜多クルーの宝物

現用

- フネタネスコープ

2012年10月21日から11月25日まで、神田の旧東京電機大学11号館にて開催された『TRANS ARTS TOKYO』では、日比野克彦氏がコミッションワーク・アーティストとして参加しました。会場では『種は船アーカイブ準備室』のタイトルで、『種は船 in 舞鶴』プロジェクトを記録・調査、アーカイブ、評価という3つの視点から捉えるための複合プロジェクトの中間報告が行われました。アーカイブの視点を取り入れた展示の監修に協力し、『種は船』プロジェクトの進行過程で、一般社団法人torindoによって作成・蓄積され、P+ARCHIVEに移管された資料を、プロジェクトのアーカイブとして展示公開しました。

ここではアーカイブの構造に基づき時系列順に36ファイルに分類し、構成されました。うち2010年、2011年に作成・蓄積された2ファイルが「非現用資料^{*1}」、2012年に作成・蓄積された34ファイルが「半現用資料^{*2}」として、アーカイブ的な視点で資料を並べて展示しました。またNPO recipが手法を設計した映像記録「フネタネスコープ」などが「現用資料^{*3}」として映写されました。（フネタネスコープの詳細は以下参照。NPO recip『記録と調査のプロジェクト「種は船」に関する活動と検証報告』公益財団法人東京都歴史文化財団 2013年）

^{*1}非現用資料：保存年限の満了後、改めて保存することが決定された資料

^{*2}半現用資料：現用資料ではないが保存年限が満了を迎えていない資料

^{*3}現用資料：現在、作成活用中の資料

展示では「現用」は、アートプロジェクトの現場で活用されている状態であると定義しました。そのため、今年度作成されてP+ARCHIVEに移管された資料は、「半現用資料」としました。しかし、「種は船」プロジェクトは今後も検証と評価が続けられるので資料が活用されている状態といえます。展示終了後にあらためて検討し、左の表で「半現用資料」として展示されたものも「現用資料」として再定義しました。進行中のアートプロジェクトで発生する資料は、検証・評価されるまでは「現用資料」として保存することが、レコードキーピングのために重要です。

◆展示の際は、左表のうち1と2の「2010年資料」と「2011年資料」は、観覧者の理解のために、それぞれ「初年度に作成・使用した資料」/「2年目に作成・使用した資料」の項目名として、キャプションを作成した。

◆展示終了後に、新たに移管された資料の調査などを行い、目録に入力した資料の総数は増加した。「本目録」では最終的に38項目に分類した。



東京文化発信プロジェクト



ART & SOCIETY
RESEARCH CENTER

『種は船 in 舞鶴』アーカイブプロジェクト 活動の記録 2012

この冊子は「東京アートポイント計画」のリサーチ型の人材育成プログラム「Tokyo Art Research Lab」の一環として実施された「P+ARCHIVE」の事業成果物として作成されました。

主催:

東京都

東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)
特定非営利活動法人 アート&ソサイエティ研究センター

協力:

HIBINO SPECIAL 一般社団法人 torindo NPO recip NPO remo

編集制作:

特定非営利活動法人 アート&ソサイエティ研究センター

〒101-0021 東京都千代田区外神田6丁目11-14-311 E

E-mail: info@art-society.com

URL: www.art-society.com

執筆協力:

齋藤柳子(4P) 松井隆(5P)

写真提供:

代和佳子(6P) 夏野菜月(10P)

デザイン:

井出竜郎

発行:

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室

〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階

TEL: 03-5638-8800

FAX: 03-5638-8811

Email: info-ap@bh-project.jp

URL: www.bh-project.jp

平成 25 年 3 月

© Art & Society Research Center

© Tokyo Culture Creation Project

無断転載・複写を禁じます

Tokyo Art Research Lab (TARL)

アートプロジェクトにまつわる問題や可能性をすくいあげ分析する、リサーチ型の人材育成プログラムです。アートプロジェクトを持続可能にするシステムの構築を目指します。東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指す、東京文化発信プロジェクト事業「東京アートポイント計画」の一環として実施しています。
www.tarl.jp

特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センター

都市や地域における芸術文化活動並びにパブリックアートの情報発信及び調査研究・実施活動に関する事業を行い、都市や地域の文化的発展と市民の文化環境の向上に寄与することを目的として活動する非営利芸術団体。

www.art-society.com